

世界文学全集 II-6

オースティン
高慢と偏見

阿部知二 訳

河出書房

世界文学全集 II-6 ジェイン・オースティン



© 1972

編集委員

阿部知二 伊藤 整
桑原武夫 手塚富雄
中島健蔵

昭和38年12月10日 初版発行

昭和47年4月28日 15版発行

定 価 500 円

訳 者 阿 部 知 二

発 行 者 中 島 隆 之

印 刷 者 小 泉 輝 章

装 幀 原 弘

印 刷・小泉印刷株式会社

製 本・岸田製本工業株式会社

発 行 所 東京都千代田区 株式 河出書房新社
神田小川町三の六 会社

電話東京 (292)大代表3711

振替口座 東京 10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

0397-310706-0961

目 次

高慢と偏見

..... 五

年 譜

..... 四〇一

解 説

..... (訳 者) 四〇五

高慢と偏見

主要人物

ベネット氏 英国西南部ハーフォードシャの田園ロングボーンに住む地主の中流紳士。

ベネット夫人 ベネット氏の夫人。五人の娘たちに良縁を得て結婚させるのが、彼女の人生最大の事業である。

ジェイン 長女。良識と寛容にとむ、氣立てのやさしい美人。二十二歳。舞踏会で金持の青年ビングリーと会い、互についてよく心をひかれる。

エリザベス(愛称リジー、イライザ) 次女。才氣にとんだ勝気な性格。ビングリーの友人ダーシーに関心をもつが、彼の傲慢な態度につよい偏見を抱く。

メアリ 三女。

キャスリン(愛称キティ) 四女。

リディア 五女。ウィカムと墮落ちして結婚する。

フィリップス ベネット夫人の妹婿。メリトンで弁護士をしていた夫人の父親の書記をつとめ、その業務を継いでいる。

サ・ウィリアム・ルーカス ベネット家のしたい隣人ルーカス家の主。

シャーロット ルーカス家の長女。二十七歳。

マライア 次女。

チャールズ・ビングリー ベネット家に近いネザフィールド荘に移ってきた富裕な独身の青年。明朗で社交的な好男子。キャロライン・ビングリー その妹。ハースト夫人はその姉。

フィッツウィリアム・ダーシー ビングリーの親友。ダービシャのペムバリーの名門の当主。すぐれた知性と氣品にとむ好男子だが、無口で氣位が高い。

ジョージアナ ダーシーの妹。

フィッツウィリアム大佐 ダーシーの従兄の軍人。

ジョージ・ウィカム ダーシー家の執事の息子の軍人。放蕩もの。ダーシーと反目しあっている。

ウィリアム・コリンズ ベネット氏の親戚の青年牧師。ベネット家の財産の限嗣相続者。シャーロット・ルーカスと結婚する。

キャスリン・ド・バーク夫人 ケント州ハンスフォードのロジングズ荘に住む名門の誇り高き未亡人。ダーシーの叔母。ガードナー氏 ロンドンで商業をいとなむベネット夫人の弟。

一章

独身の男性で財産にもめぐまれているというのであれば、どうしても妻がなければならぬ、というのは、世のすべてがみとめる真理である。

はじめて近所へきたばかりで、当の本人の気持や見解は、ほとんど分っていないにしても、周囲の家々の人の心に、この真理はかたく不動のものとなり、その人は当然、われわれの娘たちのうちのだれかひとりものものになるはず、と考えられるのであった。

「まあ、あなた」とある日ベネット夫人が夫にいった。

「ネザフィールド莊園にとうとう借り手がついたつてこと、お聞きになって？」

ベネット氏は、聞いていないと答えた。

「でも、そうなんですよ」と彼女はいい返した。「今しがた、ロングの奥さまがいらつして、すっかりそのことを話していました」

ベネット氏は、返事をしなかった。

「どんな人が借り手なのか、聞きたくはありませんの？」と妻はじれたそうに声をあげた。

「あなたは話したいのだろうね。聞くことには異存はありません」

気を引くには、それで充分だった。

「そりゃあ、あなた、知っておいていただかなけりゃ。

ロングの奥さまのお話では、ネザフィールドをお借りになったのは、北イングランドの大財産家の若い方なんですって。月曜日に四頭立ての四輪馬車^{クワーター}で下検分にいらしたのですけど、すっかり気に入って、その場でモリスさんと話をおきめになったそうですわ。ミカエル祭^{9月29日}（^{9月29日}の季^秋）も待たずにおはいりになる予定で、召使たちのだれかれも、来週のおわりまでには住みこむことになるんですって」

「何ていう名前だろう？」

「ピングリー」

「結婚してのかね、それとも独身？」

「あら、独身よ、あなた、もちろん！ 財産家で独身よ。年取四、五千ポンド。願ってもないわ、家の娘たちには！」

「どうして願ってもないのだろうか。それが娘たちにどうだというんだろうか」

「まあ、あなたって人は」と妻は答えた。「なんて手数のかかる人なんでしょう。その方が娘たちのひとりと結婚なさることを、わたしが考えていることくらい、分ってくださいな」

「彼がここに住みつくのは、そういう下心があつてのことだったのか」

「下心ですって！ ばからしい。よくもそんな口がきけますのね！ でも、もしかすると、どちらかを愛するようになることは、大いにありうるのだから。お出でになつたらすぐに、あなたに訪問していただかなけりゃ」

「そんなことをする理由は見当たりません。あなたと娘たちとでゆけばいいし、または娘たちだけをやってもし

い。そのほうが、たぶんいいだろうな、というのは、あなたは娘たちと美しさを争っているのだから、ピングリー氏が、みなの中であなたがいちばん好ましいということにもなりかねないから」

「おやおや、お世辞ですことね。それは、わたしもむかしはひとかどきれいだつたにはちがいないけど、いまさら取りたてて鼻にかける気ありませんわ。女も一人前になつた娘を五人も持つようになっては、自分の美しさなどを氣にかけてもいられませんものね」

「そういうばあいには、氣にかけようにも美しさのほうがあやしい、ということもあるようだ」

「とにかくあなた、ピングリーさまが近所にいらつたら、きつとあいさつに行つていただかなくては」

「それは約束しかねるな、ほんとのところ」

「でも、娘たちのことも考えてください。娘のどちらかのすばらしい縁組になるってことを、ちょっと考えてもごらんなさい。サー・ウィリアム・ルーカスと奥さまとは、ただそれだけの理由で、訪問することに決めていらつしやるわ。ご承知のように、めつたに新しくきた人の

ところなんか訪ねないんですのね。どうしてもあなたに行っていたかなくては、だってわたしたちが訪問するってわけにもゆきませんわ」

「それは遠慮がすぎるといふものだ。ビングリー氏は、あなたがたを大歓迎するにちがいない。わたしが一筆、どの娘を選んで結婚なさろうと異存これなくと書いて、あなたから渡してもらうことにしよう。もっとも、ひとことリジーを賞めておかなくてはなるまいが」

「そんなことは、よしていただきますわ。リジーは、ちつともほかの娘たちにまさってはいません。ほんとにあの娘は、ジェインの半分もきれいじゃないし、リディアの半分も愛想がよくないわ。でも、あなたは、いつもひいきするのはあの子のことね」

「ほかの娘たちは、一人として大した長所がないね」と彼は答えた。「みんなそこいらの娘たち同様、ぼかばかしくて物を知らない。だがリジーは、姉妹たちよりもいささか頭がいいようだ」

「まあ、あなたったら、自分の子供たちをどうしてそんなふうに悪くいえますの？ わたしを苦しめてよろこん

でいらっしゃるのね。わたしの痛みやすい神経に、これっぽっちの思いやりも持っていないんだわ」

「それはまちがってるよ、あなた。わたしは、あなたの神経には充分に敬意をはらっているよ。それはわたしの旧友なのだ。少なくともこの二十年間、あなたが神経のことをいたわりながら話すのを聞いてきた」

「ああ、わたしの苦勞がどんなものか、あなたには分らないんだわ」

「でも、あなたがその苦勞を乗りこえて、年収四千ポンドの青年がたくさんこの近所へやってくるのを見るまで、生きてもらいたいね」

「万一そういう人が二十人くるようなことがあっても、あなたは訪問しようとなさらないのだから、わたしたちには何にもなりませんわ」

「二十人もきたとすれば、まちがいのないところ、わたしはその全部を訪問することになるだろうて」

ベネット氏は、機才、皮肉なユーモア、含蓄、気まぐれなどの一癖ある混合体だったから、妻に自分の人柄を理解させるには、二十三年間の経験もまだ不充分であっ

た。一方彼女、心を探りだすのには、それほど困難をと
もなわなかった。彼女は、理解力の弱い知識のせまい、
気分の変わりやすい人だった。何か不満なことがある
と、神経が痛むと訴えた。彼女の人生の事業は、娘たち
を結婚させることであり、なぐさめといえ、訪問と世
間話とだった。

二章

ベネット氏は、もっとも早くビングリー氏にあいさつ
に行ったもののひとりだった。前々から訪問するつもり
でいたのだったが、妻には、ゆくものかと最後までいい
はっていた。それで訪問をしたその日の夕方まで、彼女
はそれをすこしも知らなかった。そのときになって、次
のようにしてそれを明らかにした。二番目の娘が帽子の
飾りをつけているのを見て、とつぜん話しかけた――
「ビングリーさんが気に入ってくれるといいがね、リジ
ー」

「ど、い、なの、が、ビングリーさまのお気に入るか、わたした
ちには知る由もありません」と彼女は遺恨をこめていっ
た。「訪問もしないんですから」

「でも、お忘れになっててよ、母さま」とエリザベス(このザベスの愛称が)「ビングリーさまには舞踏会で
お目にかかることになって、そしてロングの奥さまが紹
介するって約束なさったのじゃなくて」

「ロングの奥さまは、そんなことしないと思うわ。ご自
分の姪めいが二人もあるんだもの。自分勝手の、うわべだけ
の人だからね、わたしはてんであの人を問題にしていな
いのよ」

「わたしも同じだ」とベネット氏がいった。「あの人の
世話を、あなたがたが当てにしていけないことが分って、
安心した」

ベネット夫人は、それに返事などしてたまるものか、
という心だったが、それでもがまんできなくなつて、娘
たちの一人を叱りはじめた。

「そんなに咳をつづけるのはやめて、キティ(キティはキ
スリンの愛称)、ごしょうだから！ 少しはわたしの神経のことも思

ってください。神経が引き裂かれそうじゃないの」

「キティは、咳をするとなると遠慮もないようだね」と父はいった。「時をきらわず咳をするね」

「わたし、面白半分で咳をしてるんじゃないよ」と不満そうにキティが答えた。「この次の舞踏会はいつなの、リジー？」

「二週間後の明日よ」

「そう、そうだったわね」と母が声を高めた。「するとロングの奥さまは、その前の日までは帰っていらっしやらないわけになるから、ご自分もあの方と知り合いでないのでは、紹介の役をつとめるなんてこと、できっこありません」

「それでは、あなたが友人に得意の場を見せて、ビングリーさんを彼女に紹介するといいいね」

「そんなことだめよ、あなた、だめだわ。わたし自身近づきになっていないんですもの。どうしてそんなに人からかうのですか」

「あなたの慎重さは、尊敬に価する。二週間の交際だけというのは、たしかにひどく物足りないね。人がじ

っさいにどんな人物かは、二週間もたてば分るというものではない。だが、こちらでそこを踏み切らなけりや、だれかほかの人がそうすることになる。そして、ロング夫人と姪ごさんたちも、けっきょくは運をためす機会にあたえられるのだ。その場合ロング夫人に親切な行為と思ってもらえるのだから、あなたが紹介の勞をとらないのならば、わたしが自分で引受けよう」

娘たちは、父に目をみはった。ベネット夫人は、「ばかな、ばかな！」というだけだった。

「大へんな勢いの捨てぜりふだが、それはどういう意味なのですか」と彼はききとがめた。「人を紹介するという形式や、それが重大なものとされていることを、ばからしいとでも考えているのだろうか。その点では、あなたには賛成できないな。メアリはどう思うかね。あなたがかねて思慮深いお嬢さんだし、すぐれた書物を読んで抜書きなんかもしてるのだから」

メアリは、何かひじょうに行きとどいたことをいいかけたが、どういっていいか分らなかった。

「メアリが思考をととのえているあいだ」と彼はつづけ

た。「ピンググリーさんの話にもどうじゃないか」

「ピンググリーさんなんか、胸が悪くなります」と妻は声をあげた。

「そういうことを聞くとは残念だ。だが、どうしてまえにそういつてくれなかったのですか。今朝それだけのことが分っていたら、けつして彼のところに出かけてなかゆかなかつたらう。ほんとにあいにくだ。だが、たしかに訪問をしてしまった以上、いままら交際を絶つわけにもゆかない」

婦人たちのおどろきは、まさに彼の望んだとおりだった。ベネット夫人のそれは、ほかのだれよりも大きかつたらう。もっとも彼女は、よろこびの最初の浪立ちがしずまると、わたしははじめからずっと、こうなることと予期していたと言明しだした。

「ほんとにいいことをしてくださいましたわ、あなた！でもね、わたしは、けつきよくはあなたを説き伏せることができると思っていました。娘をとてかわいがつていらつしやるのだから、こんなすばらしい交際をあなたがお見のがしになるなんてことはないと分つていました

わ。そりゃ、わたしとてもうれしくて！それにまた、今朝いらしたのに、いままで、そのことについて一言もいわないなんて、まったくおどけてますわね」

「さあ、キティ、好きだけ咳をしてもいいよ」とベネット氏はいった。そしてそういいながら、妻の狂喜にうんざりして、部屋を出ていった。

「ほんとにすばらしいお父さまよ、ねえ！」とドアがしまつたとき、彼女はいった。「お父さまのご親切に、あなたがたがどうしてお返しするか分らないわ。あら、そういうえば、わたしもよ。わたしたちの年配になると、毎日新しく人と近づきになるなどというのは、あまり愉快なものじゃないわ。でも、あなたがたのためならば、わたしたちはどんなことだつてしてあげてよ。ねえ、リディア、あなた、い、ち、ば、ん、年が若いけど、今度の舞踏会では、ピンググリーさまがダンスの相手になつてくださるわ」

「まあ！」とリディアは勢いよくいった。「わたし怖くなんかないわ。い、ち、ば、ん、年が若いけど、い、ち、ば、ん、背が高いんですもの」

その夜は寝るまで、彼がどんなに早く、ベネット氏の

訪問への答礼にくるかを当ててみたり、彼を食事に招くのはいつにしたらいいかを決めたりして、過ごした。

三章

けれども、ベネット夫人が五人の娘の協力を得て、さまたげにたずねてみても、夫からビングリー氏について納得のゆく説明を引出すには充分でなかった。彼女たちは、いろいろな方法で彼を攻めてみた。臆面もなく質問を浴びせかけたり、言葉たくみに話を持ちかけたり、遠まわしに探りを入れたりした。だが彼はだれの手からもしり抜けたので、彼女たちはとうとう、隣人ルーカス夫人のまた聞きの情報を受けいれるほかはなかった。夫人の報告は、じつにすばらしいものだった。サー・ウィリアム・ルーカスは、彼が大いに気に入った。ひじょうに若く、おどろくべき好男子で、まことに感じがよく、かたて加えて、今度の舞踏会にはたくさんの人を連れてくるつもりだった。これ以上よろこばしいことがあるだろ

うか！舞踏が好きだということは、一歩すすめば恋におちることになるわけで、ビングリー氏の心をとらえるという強い希望を、みな抱きはじめた。

「もし娘たちの一人がネザフィールドで幸せに身を固めて」とベネット夫人は夫にいった。「ほかの娘たちも同じようにりっぱな結婚をするのが見られさえしたら、わたしは何も望むことがないわ」

二、三日すると、ビングリー氏がベネット氏の訪問への答礼にきて、書斎に十分ほどいっしょにいた。彼は、かねてから噂に聞いていた美人の令嬢たちをちらとでも見せてもらえろという希望を抱いてきたのだが、会ったのは父親だけだった。令嬢たちは、それよりいくらか運がよくて、二階の窓から、彼が青い服を着て黒い馬に乗ってきたことをたしかめろという収穫をもった。

それからまもなく、正餐の招待状が送られ、ベネット夫人が、家政のほまれを高めるべき献立の計画もおわったとき、返事がとどいて、それは延期ということになった。ビングリー氏は、次の日ロンドンへゆかなければならず、したがってご招待の栄を心苦しくも云々、という

のだった。ベネット夫人は、すっかり度を失ってしまった。ハーフォードシャにきた早々に、ロンドンにどんな用事があるのか想像してみることもできず、あの人はいつもあちこちと飛びまわっていて、かんじんのネザフィールドに落ちつくことをしないのではないかと、心配しはじめた。ルーカス夫人は、あの人がロンドンへお出かけになったのは、舞踏会のためにたくさんの人を連れてくるためだろうと思いついて、彼女の不安を少しやわらげた。するとまもなく、ビングリー氏は、十二人の婦人と七人の紳士とを連れてくるという報告がきた。娘たちは、そんなにたくさんさんの婦人がくるのを嘆いたが、舞踏会の前日に、ロンドンから連れてきたのは十二人ではなく六人だけで、姉妹が五人といとこが一人だと聞いて、ほっと安心した。しかも一行が会場へはいってきたとき、全部で五人だけで、ビングリー氏、二人の姉妹、長女の夫、それにもう一人の若い男性だった。

ビングリー氏は好男子で紳士らしい人であった。感じのいい表情と、ほかからかで気取りのない態度とをもっていた。彼の姉妹は、洗練された女性で、寸分の隙もなく

上流風であった。義兄のハースト氏は、ただ紳士と見えるだけだったが、友人のダーシー氏は、そのみごとな高い体軀、秀いでた容貌、気品ある物腰、そして彼がはいってきってから五分とたたぬうちにあたりに広がった、一万ポンドの年収があるという情報などによって、すぐさま一座の注意をひいた。男たちは、彼を風姿堂々たる人だといい、婦人たちは、ビングリー氏よりも好男子だと断言し、それでその夜の半ばごろまでは、大へんな賛美の目でながめられたのだったが、そのうち彼の態度が不快な感じを人にあたえ、その人気の汐は引いてしまった。というのは、彼は傲慢で、一座の人々を見くびり、人々と楽しむ気などないということが分ったからだ。彼がダーシーに大きな領地を持っているということをもつてしても、きわめて取つきにくく不愉快な風貌であり、彼の友人と比べる値うちもないという事実を、どうすることもできなかった。

ビングリー氏は、まもなく室内の主だった人々と近づきになっていた。はつらつとして人見知りせず、どの舞踏もおどり、舞踏会のおひらきがあまり早いと怒りも

し、自分もネザフィールドで舞踏会をもよおすつもりだと語った。そういう人好きのする性質が、大いに物をいわないはずはない。彼とその友人とは何と対照的だらうか！ ダーシー氏は、ハースト夫人と一度、そしてビングリー嬢と一度踊っただけで、ほかの婦人に紹介されることを拒み、その夜はおわりまで、室の中を歩きまわっては、ときどき自分の仲間のだれかに話しかけて、時を過ごした。彼の性格ははっきりとしたものだった。世界でもっとも高慢な、もっとも不愉快な人物で、もう二度ときてもらいたくないと、だれもが思った。もっともはげしく彼に反撥したひとり、ベネット夫人であって、大体から彼の振舞いが気に入らなかつたうえに、彼女の娘のひとり、彼が無視したので、ことさら彼を憎む心になつてしまつた。

エリザベス・ベネットは、紳士たちの数が少なかつたので、二度も、踊らずに坐っていなければならなかつた。そのときちよつとの間、ダーシー氏が、彼女のすぐ近くに立つており、そこへビングリー氏がしばらく踊りをやめて、友人に仲間入りをすすめてきて、二人で話し

ているのを、彼女は耳に入れた。

「さあ、ダーシー」と彼はいつた。「きみにどうしても踊ってもらふよ。そんなばかげた格好で、一人で立つてゐるのを見たくないんだ。踊らないなんてことはないよ」

「ごめんこうむるね。とくに親しく知り合つた相手でないければ、ぼくは踊るのはいやだつてことは、きみも知っているだらう。こんな舞踏会で踊るのなんかは、耐えられないことだ。きみの姉妹たちは約束済みだし、この室の、ほかのどの女とがまんして相手をして、それはぼくにとって責苦ではないか」

「ぼくはきみほど氣むずかしくなりたくない」とビングリーが声をとがらせた。「二国をやるといわれてもだよ！ 誓つていうが、今夜ほどたくさんのお嬢さんたちにぶつかったことがない。それにね、そのうち数人はとびぬけてうつくしいではないか」

「きみは、この室ただ一人のきれいな娘と踊っているのだ」と長女のベネット嬢を見ながら、ダーシー氏はいつた。

「ああ、あんな美人に、ぼくはいままでに出会ったことがない！でも、妹のひとりがいて、きみのすぐうしろに坐っているが、とてもきれいだし、とても感じがよさそうだ。ぼくの相手^{パートナー}に頼んで、きみを紹介してもらおうか」

「どれをいつているのか」と振り向きながら、彼は一瞬エリザベスを見たが、やがて彼女の視線に合うと、自分の目をそらして冷然といった。「まずまずだ。だが、ぼくの気をそるほど美しくはない。それにぼくはいまのところ、ほかの男たちに無視されている若い娘さんの評価を高める気もしないのだ。きみはきみの相手のところへもどって、その人の微笑でも楽しむがいい。ぼくにかまっていでは時間のむだというものだから」

ビングリー氏は、彼の忠告にしたがった。ダーシー氏は、行ってしまった。そして残ったエリザベスは、彼にたいしてあまり温かい感情を持ったとはいえなかった。しかし彼女は、友人たちのあいだに、じつに朗かにその話をふりまいた。というのは、彼女の快活でいたずらっぽいいところのある気質は、滑稽なことが大好きだったか

らである。

その夜は、家族全員にとってまったく楽しくすごて行った。ベネット夫人は、長女がネザフィールドの人たちに好感をもつて迎えられているのを見た。ビングリー氏は、彼女と二度も踊り、彼の姉妹は彼女を特別に遇した。ジェインは、このことに母親と同じくらいに、もっとも、もっとひそやかにだったが、よろこんだ。エリザベスは、ジェインのよろこびを感じとった。メアリーは、自分がこの近辺でいちばん教養のある娘だ、とだれかがビングリー嬢にいつているのを耳にした。そしてキャスリンとリディアとは、幸運にも舞踏の相手にこと欠かなかったが、彼女たちは舞踏会では、それだけのことを考えるだけで心はいっぱいだった。だからみなは、快活な気分で、自分たちが住んでおり、その主だった住民でもあるところの村、ロングボーンへ帰った。帰ってみると、ベネット氏はまだ起きていた。本を読んでいると、時間など忘れてしまうのだった。それにこの場合、あんなにもはなばなしく期待をいだかせた夜会の結果に、大いに好奇心を持っていた。じつのところ、あの未知の男にた

いする妻の期待が、すっかりはずれてくれればと思つていた。ところが、全然べつな話を聞かされる羽目になったのである。

「まあ、あなた」と部屋へはいるなり「ほんとに楽しい晩でしたわ、とてもすばらしい舞踏会でしたわ。あなたもいらつしやればよかったのに。ジェインが、それはそれは、いいようないほどの人気でした。なんときれいなんでしょうと、だれもがいましたよ。そしてビングリーさまも、あの娘をとても美しいと思つたでしょう、二度も踊りましたわ。まあ考へても、ごらんないよ、あなた。あの方、ほんとうに二度も相手になさつたのよ。そして、二度も申しこまれたのは、あそこではあの娘だけでした。まず最初に、あの方、ルーカスのお嬢さんに申しこみました。彼女と踊っていらつしやるのを見ると、あたししゃくにさわつたわ。でも、あの方、彼女にはちつとも感心しなかつたのですよ。だって、だれだって感心できませんよ。それであの方、ジェインがそれからそれへと踊りをこなしてゆくのをごらんになって、すっかりおどろいた様子でしたわ。そこで、あれはだれかとたず

ねて、紹介されると、次の二回を申しこんだのですわ。

それから、三度目の組曲をキングさんと踊り、四回目はマライア・ルーカスと、五回目にはまたジェインと、六回目はリジーと踊り、ブーランジェ踊りは——」

「ビングリーさんが、このわたしに少しでも思いやりをもつていたのなら」と夫はじれつたそうに叫んだ。「その半分も踊りはしなかつたらうに！ 後生だから、ダンスの相手のことは、もうよしておくれ。一回目のダンスで足首でもくじいてくれたらよかったのに！」

「まあ、何をおっしゃるの」とベネット夫人はつづけ「わたし、あの方はすてきだと思いますよ。おどろくほど好男子ですわ！ それに姉妹の方も、人好きのするひとたちですよ。あの方たちの衣裳ほど優雅なものを、わたしいままでに見たことがありますわ。ところでハーストの奥さんのガウンのレースは、——」

ここでまた、彼女はさえぎられた。ベネット氏が、衣裳の説明はもうたくさんだといったのだ。それでほかの話題をさがさなければならなくなり、ダーシー氏はむかつくほど無作法だったことを、かなりの遺恨をこめて、